国立国語研究所学術情報リポジトリ

Is Japanese a Dependent-marking Language? ?Analysis of a Film Script?

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-10-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 風間, 伸次郎, KAZAMA, Shinjiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000461

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 9: 51–80 (2015)
ISSN: 2186-134X print/2186-1358 online

日本語（話しことば）は従属部標示型の言語なのか？
――映画のシナリオの分析による検証――

風間伸次郎

東京外国語大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

日本語は動詞の人称変化を持たず，格助詞によって文法関係を示すので，書きことばをみる限りでは，典型的な従属部標示型（Dependent marking）の言語にみえる。しかし話しことばにおける実際を観察すると，主語や目的語が出現する文は少なく，たとえ現れても無助詞であることが多い。他方，述語にはやりもらいの動詞や受身，テクルなどの「逆行」表示があり，モダリティの諸形式や感情述語など主語の人称に制約のあるものも多い。したがって主語の人称が述語の方でわかるようになっている場合も多く存在する。つまり話しことばの日本語はむしろ主要部標示型（Head marking）の言語としての性質を持っているといえるかもしれない。

本稿では，まず上記の仮説に関連する先行研究を集め，話しことばでハやガなど従属部標示の要素がどのような条件でどの程度機能しているのか，他方上記のような主要部標示的な要素にどのようなものがどれぐらいあるのか，を整理する。

次に話しことばにおける実際の状況がどのようであるのかを知るために，1つの映画のシナリオ全体を手作業により徹底的に分析して，日本語の話しことばがどの程度主要部標示型の言語としての性質を持っているのかを検証する *。

キーワード：節内における標示の位置，従属部標示型，主要部標示型，無助詞，反転

1. 従属部標示型の言語と主要部標示型の言語

従属部標示型と主要部標示型の別は，Nichols（1986）によって提示された。なお本稿ではそのうち節のレベルでの標示型を問題にする。

主要部標示型の言語とは，我々日本語に慣れている者には少しわかりにくいが，次の例にみるマヤ語族のツォツィル語のような言語である。

（1） *jar aak'aalaa7 x-ø-kee-k'aq aab'aj pa rwi7 ja jaay*
the boys COMP-3SG-3PL-throw rock on top. of the house
「その少年たちは屋根の上で石を投げていた」（Nichols and Bickel（2005: 98）による [1]）

すなわち，従属部である名詞項（*aak'aalaa7*「少年たち」，*aab'aj*「石」）には何の標示もなく，他方，主要部である動詞（*-k'aq*「投げる」）は主語と目的語の人称に関して語形変化を行い，3人称複数主語と3人称単数目的語を標示している。

---

* 本稿の内容は，筆者が参加している国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」（プロジェクトリーダー：ジョン・ホイットマン）の研究成果の一部である。投稿を薦めて下さったホイットマン先生に記して感謝申し上げたい。重要なコメントを下さった久保智之先生にも記して感謝申し上げたい。しかし本稿における誤謬は全て筆者の責任に帰するものである。

[1] なおこの文は，Nichols and Bickel（2005）が Dayley（1985: 282, 75）より引用しているものである。

これに対し，従属部標示型の言語では，主要部である動詞には人称が標示されず，従属部である名詞項が格を標示する。

つまり名詞項と動詞の文法関係が，動詞の方に標示されれば主要部標示型の言語，名詞の方に標示されれば従属部標示型の言語ということになる。

Nichols and Bickel（2005）によれば，主要部標示型の言語は中南北アメリカ，オーストラリア，ニューギニアにおいては一般的だが，その他の地域においてはきわめてまれである。他方，従属部標示型は，ユーラシアおよび北アフリカで一般的であるが，北アメリカではまれであるという。北東アジアにおいて，日本語との類型論的な類似が指摘されるアルタイ諸言語や朝鮮語も従属部標示型の言語とされている。他方，アイヌ語は典型的な主要部標示型の言語である[2]。

2. 先行研究とそれに基づく演繹的考察

2.1 では，日本語の話しことばにおける名詞がどの程度主格対格（および主題）によって文法関係を標示しているのかについて検討する。同様に 2.2 では，日本語の話しことばにおける述語がどの程度主語の予測を可能としているのかについて検討する。

2.1 日本語（話しことば）の名詞は，本当に主格対格によって文法関係を標示しているのか？

Nichols（1986）でも Nichols and Bickel（2005）でも，日本語は従属部標示型の言語とされている。動詞に人称変化がなく，名詞が格助詞をとることによって文法関係が標示されているのであるから，このことには一見何の疑いもないように思える。

しかし，いわゆる広い意味での pro-drop の言語である日本語（話しことば）では文中に主語も目的語も現れないことが多い。さらに，たとえ現れても主格の助詞とされているガも対格の助詞とされているヲもついていないことが多い。これはすなわち日本語（話しことば）が従属部に文法関係を示す標示を用いないということを意味する（Nichols（1986）の分類によれば，No marking の言語ということになる）。格助詞のない名詞が現れることは，近年は無助詞現象の名で取り扱われている。この 2.1 節ではまずこの無助詞と助詞（ハ・ガ・ヲ）の対立を問題にする。

無助詞を省略とはみなさず積極的な機能を持つものとして捉えるものには，尾上（1987）をはじめとして近年ある程度研究が蓄積されてきている。以下では，先行研究を踏まえ比較的良くまとまっていると思われる黒崎（2003）の記述にしたがい，無助詞しか許容されない条件を示す（例文も黒崎（2003）より）。

［無助詞しか許容されない条件］

(2) [1] 聞き手の情報を求める文：なあ，これ（ø／＊ハ／＊ガ），わかる？
[2] 聞き手への要求を表す文：鍵（ø／＊ハ／＊ヲ）貸して。
[3] 話し手が主題の文：私（ø／＊ハ／＊ガ），よくやるんですよ。

[2] ただし，Nichols and Bickel（2005）はアイヌ語を No marking の言語としている。これはおそらく動詞の人称標示要素を接語とみているためだと考えられる。

[4] 聞き手が主題の文：あんた（ø／*ハ／*ガ），偉いね。

[5] 眼前の事象について述べる文：あっ，この時計（ø／*ハ／*ガ）止まってる。

[6] 対象物の説明をする文：どうぞ，傘（ø／*ハ／?ヲ），お使いください。

[7] 感想・感覚を述べる文：これ（ø／*ハ／*ガ），すごい美味しい。

[8] 現象描写文の疑問文：杏子さん（ø／*ハ／*ガ），いますか？

[9] 新しい話題の新規導入：玲子さんの話（ø），した？

[10] 特別な表現：お電話（ø／*ハ／*ヲ）ありがとう。

まず，かなり多様な文において無助詞しか許容されないことに驚く[3]。ただこの黒崎（2003）の指摘はいくつかの異なるレベルの問題を同じレベルに並べてしまっているので，これを以下に階層的に整理したい。

まず人称に関して，1，2 人称が主語もしくは目的語になっている場合を考える。

命令文や勧誘文，意志や願望，感情や感覚を示す文では，仁田（1991）が考察しているように 1, 2 人称に主語が限定されるため，強調などを伴わない限り主語は現れない。黒崎（2003）の [2] によれば目的語も無助詞となる。

黒崎（2003）の [3]，[4] の指摘にあるように，属性叙述文（有題文）で 1，2 人称が主語になっている場合には，その主語は無助詞となる。次に角田（2009: 54）にあるように，事象叙述文で 1，2 人称が主語になっている場合にガを用いてこれを標示すれば，総記の解釈を受ける。

(3)　私が勉強しています。

1，2 人称が目的語になっている場合には，2.2.3 節で後述するように，受身文になるのが一般的であると考えられる。したがって理論的に考えると，1，2 人称が主語もしくは目的語になっている場合には，純粋に格助詞として機能するガやヲはほとんど現れないことになる。

次に 3 人称の主語もしくは目的語について考えよう。

まず 3 人称の主語が無生物である場合である。他動詞の主語が無生物で，目的語が人間をはじめとする生物である場合，このような文は日本語では嫌われることが指摘されている。これは角田（2009: 50–53）にあるように名詞句階層から説明される。実際にはこうした事態では，英語などで無生物主語で現れる要素は原因となるか，受身文の斜格に降格されてしまうことになる。

次に生物無生物に関わらず，3 人称が主語や目的語である場合について考える。まず全体が新情報である文で，その主語や目的語が聞き手の管理下にある情報である場合には，大谷（1995a, b）の指摘にあるようにそれらは無助詞で現れる（下記の例 (4), (5)）。これは指示詞や指示詞によって修飾されているものを含む。黒崎（2003）の [5]，[7]，[8]，[9] は，この全体が新情報である文に該当する指摘であるといえよう。

[3] ただこれらの条件の文では常に無助詞しか許容されないか，といえば，疑問が残らないでもない。文中の要素を若干変えるだけで，いずれかの助詞が可能になるものもある。今後，帰納的な研究の積み重ねによってこれらの条件が精密化される必要がある。

(4) （ずっと，山田さんを捜している。）
甲：ねえ，そっちにはいない？
乙：うん……あれっ！
山田さん（ø／*ハ／*ガ）あんなところにいるよ。 （大谷 1995b: 289）[4]

(5) （山田がその女性に送った指輪を，ちゃんとはめてくれているかどうか，佐藤に見てもらっている。）
山田：どうだ。見えるか？
佐藤：あっ，指輪（ø／*ハ／?ヲ）はめてるよ。 （大谷 1995a: 64）

大谷（1995a, b）は，さらに非現場要素（の新規導入）でも，聞き手と共有されている知識である場合には無助詞しか許されないとしている（主語に関して）。

(6) （妻に突然客が来た。まだ妻は帰宅していないので，客間に通しておいた。やがて妻が帰ってきた時の夫の発話。）
おかえり，お客さん（ø／*ハ／ガ）来てるよ。

(7) （あらかじめ妻から聞いていた客が訪ねてきたので，客間に通しておいた。やがて妻が帰って来た。）
おかえり，お客さん（ø／*ハ／?ガ）来てるよ。 （以上，大谷 1995b: 291）

指示詞で示される直示的な要素が無助詞になることも指摘している。

(8) あっ，時計（ø／*ハ／ガ）止まってる。
あっ，この時計（ø／*ハ／*ガ）止まってる。 （大谷 1995b: 289）

全体が新情報である文の述語動詞は，一般に存在，出現，発生，消滅などを示すので，存現文と呼ばれている。

他方，存現文でない場合（判断文）は，全体が新情報ではないので，何らかの旧情報，つまり主題が存在するはずである。主題はすでに談話に導入され今話題となっている対象であるのだから，基本的に文中に現れる必要がない。必要なのは一番最初に談話に導入される時であるが，この時その対象が聞き手の知識に共有されている場合には大谷（1995a, b）の指摘にあるようにやはり無助詞で現れる。聞き手の知識に共有されていなければ,「って（いうのがあるんだけど知ってる？）」など，今度はさらにハ以外の助詞を用いて聞き手の知識に導入しなければならないと考えられる[5]。

上記のケースを除外していくと残るのは次のケースである。

A 従属節中の主語や目的語

[4] 引用に際し，原文の「が／は／を」をカタカナに変更し，順序を入れ替えた。
[5] ただしこの考察は理念的なものであるので，今後の帰納的な検討を必要とする。

B 聞き手の管理下にない情報についての存現文の 3 人称の主語および目的語
C 判断文の一部

このように考えて来ると，日本語（話しことば）で，名詞がハやガやヲを伴って現れることは決して多くないと考えることができる。他方，黒崎（2003）には，無助詞が許されず，ハやガが現れる条件も考察されている。

【ハが省略[6]できない条件】
D 対比を表すハは省略できない
E 恒常的な出来事や客観的な事実を説明する文のハは省略できない
【ガが省略できない条件】
F 総記[7]を表すガは省略できない
G 連体修飾節の中にあるガは省略できない
H「存在を表す平叙文」のガは省略できない
【ヲが省略できない条件】
I 強調を表すヲは省略できない

野田（1996: 272）は，ハとガと無助詞（下図では「～ϕ」）の現れを次のような図に整理している。

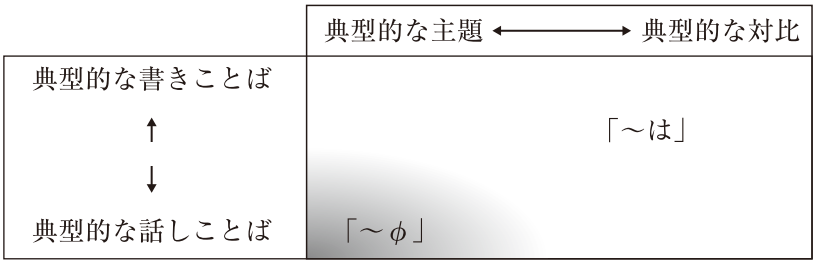

図 1 「は」と主題性の無助詞（野田 1996: 272）

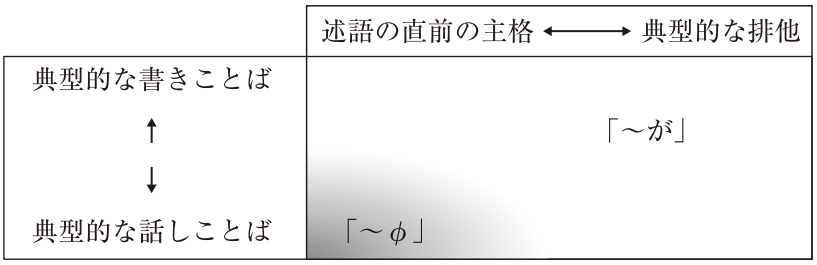

図 2 「が」と非主題性の無助詞（野田 1996: 272）

[6] 厳密には「省略」ではなく,「ハが現れず無助詞しか許容されない」とすべきだが, 便宜上, 先行研究に倣い, ここではこの用語を使用する。
[7] 黒崎（2003）や野田（1996）は「排他」という用語を用いているが，本稿では「総記」に統一する。

本稿の対象は野田（1996）のいう「典型的な話しことば」であるので，図 1 および図 2 の下部のみを問題にすることになる。するとやはり黒崎（2003）の指摘と同様に，ハは典型的な対比，ガは典型的な総記，無助詞は典型的な主題および「述語の直前の主格[8]」を主に示す，ということになる。対比も総記も情報構造に関しては意味的に有標なものであると考えられる。したがって，結論を先に示すならば，話しことばにおいてデフォルトな格標識はむしろ無助詞であり，（もちろんハはとりたての 1 つであるのだが）ガもコソなどに近いとりたての機能を持っているものとみなしたい[9]。

2.2 日本語（話しことば）の述語は，かなりの場合に実は主語の人称を予測可能にしているのではないか？

たしかに日本語の述語には直接主語の人称を標示する要素は存在しない[10]。しかし，間接的には人称を予測可能にする述語は多数存在することがすでに指摘されている。このことを理解するためには，反転というシステムの理解が不可欠であるので，まず 2.2.1 でこれを簡単に説明する。

しかるのちに日本語における具体的な反転の標示要素をとりあげる。すなわち，2.2.2 では補助動詞「来る」とやりもらいの動詞を，2.2.3 では受身をとりあげる。

さらに，積極的な主要部標示の要素ではないが，他の機能をメインとする諸形式が主語の人称に関して制限を持っていることも指摘されている。そこで，2.2.4 では働きかけのモダリティによる人称の指定について，2.2.5 では観察の証拠性（evidential）による人称の指定について順にみる。

---

[8] 野田（1996: 271）は先行研究も示しつつ，述語の直前の主格が無助詞になりやすいとしている。しかしこれでは不十分で，黒崎（2003）や大谷（1995a, b）の指摘するように，全体が新情報である文が無助詞になりやすいとみるべきであると筆者は考える。

[9] 本稿ではこれ以上深く立ち入ることをしないが，このことは日本語におけるとりたてと格の体系全体に関わる大きな問題である。すなわち，三上章による諸研究以来，日本語学においては格ととりたてを峻別するようになった。「私は食べた」のハの後ろにはガが，「昼ご飯は食べた」の後ろにはヲが隠れているものとされ，「象は鼻が長い」のハの後ろにはノが隠れているものと分析されるようになった。しかし無助詞をデフォルトの絶対格（主格と対格の機能を持つ格）とみなせば，ハもガもヲも無助詞に有標のとりたてがついたものとみることができる。この分析は，ニハ，デハ，カラハ，のような格にハが連接し得るのに対して，* ガハ，* ヲハが許されないことをよく説明する。

さらに，そもそも情報構造と統語論を別のレベルに分けるべきなのか，という問題をも提起する。たとえば，Hopper and Thompson（1980）による他動性の研究では，10 の基準をあげ，他動性を段階的なものとして捉えている。それら 10 の基準の HIGH の側ではより他動的な格枠組みが現れ，LOW の側ではそうではない格枠組みが現れるとしている。その 10 の基準の中でも特に O individuation の例として Hopper and Thompson（1980）は，エスキモー語において，定の目的語は絶対格で現れるが，不定の目的語は逆受動により斜格に降格して現れることをあげている。つまり，ここでは統語論と情報構造は同じレベルで扱われているということになる。ここで一部のハ，特にハ－ガ構文のハによる名詞項は他の格とは置き換えにくいことに注目したい（?? 象が鼻が長い，?? 彼が犬がこわい）。つまりハは述語に対して一定の格として機能していると考えることができる。

したがって筆者は，たしかに統語論と情報構造は基本的には分けて考えるべき別のレベルの問題であると考えるものの（角田（2009: 177–240）参照），ハ・ガ・ヲのような形式においては，2 つのレベルの機能が大きくオーバーラップしていると考える必要があるのではないかと考えている。

[10] 本稿で主要部「標示」という場合の「標示」とは，主語の人称そのものの「標示」だけではなく，主語の人称を予測可能にする要素や主語の人称を一定の範囲に制限する要素の「標示」をも意味している。したがって厳密にいえば，Nichols（1986）のいう主要部「標示」の定義よりも若干拡大解釈したものであることをことわっておきたい。

2.2.1 反転

反転というシステムは，北米のアルゴンキン諸語に広く観察される。たとえばフォックス語では，1 ＞ 2 ＞ 3 ＞ 4[11] という人称の階層があらかじめ決まっていて，この階層の左から右へ行為が行われる時には順行の接辞が用いられ，右から左に行われる場合には逆行の接辞が用いられる。なおこの階層における 1 人称と 2 人称の順序は，アルゴンキン諸語の言語間で異なっているという。

(9) a. *ne-waːpam-**aː**-wa*「私は彼を見る」
1SG-見る-**順行**-3 (Bloomfield 1946: 97)

b. *ne-waːpam-**ek**-wa*「彼は私を見る」
1SG-見る-**逆行**-3 (Bloomfield 1946: 97)

このようなシステムによる文法関係の標示は反転と呼ばれている。これは人称標示そのものとは少し異なるが，動詞の側で節内の文法構造を示す点で主要部標示の 1 つの方法とみることができよう[12]。なおアルゴンキン諸語は主要部標示型の言語とされている (Nichols and Bickel 2005)。

2.2.2 補助動詞「来る」とやりもらいの動詞

補助動詞「来る」とやりもらいの動詞が一種の反転であることはすでに指摘されている (Shibatani 2003)。まず以下の文で，補助動詞「～してくる」をはずしてしまうと，行為は 3 人称から 3 人称へ向かって行われるように感じられる（例は水谷（1985: 29）より引用）。

(10) a. きのう昔の友だちがたずねてきた。／母が冬の衣類を送ってきた。／ゆうべ，田中さんが電話してきた。

b. きのう昔の友だちがたずねた。／母が冬の衣類を送った。／ゆうべ，田中さんが電話した。

「あげる」と「くれる」は英語に訳せばともに give であるが，次のように人称に関して相補的に現れることが指摘されている（大江 1975: 31–37，久野 1978: 140–152）。

1 ＞ 2	私があなたにあげる	?? 私があなたにくれる
1 ＞ 3	私が A にあげる	?? 私が A にくれる
2 ＞ 1	* あなたが私にあげる（＞くれる）	あなたが私にくれる
2 ＞ 3	あなたが A にあげる	? あなたが A にくれる
3 ＞ 1	*A が私にあげる（＞くれる）	A が私にくれる
3 ＞ 2	A があなたにあげる	?A があなたにくれる
3 ＞ 3	A が B にあげる	?A が B にくれる

[11] この言語には，いわゆる第 4 人称（obiviative）がある。
[12] 反転に関しては，これを人称の指定に関わるものとする立場と，態の一種として考える立場がある。反転はアルゴンキン諸語で主に研究されてきた文法現象だが，世界のさまざまな言語で観察され，従来受動などにカテゴライズされていたものも，分析のしようによって反転と記述できる場合もあるという（以上，巽（2012）による）。たとえばヌートカ語で本来「受動態」と記述されてきた形式を反転マーカーであると再解釈した Whistler（1985）などがある（遠藤 1996）。

3 人称同士では近しい関係の者か否かによって異なる。

(11)　彼が（私の）弟にくれた。／彼が（A さんの）弟にあげた。

2 人称と近しい 3 人称ではいずれも可能である。

(12)　あなたが私の弟にくれた。／あなたが私の弟にあげた。

したがって人称の階層はおよそ以下のようになり，左か右へ行為が及ぶ場合，「あげる」が用いられ，右から左へは「くれる」が用いられるとして，整理することができよう。

1 ＞ 2 ∽ 3 近＞ 3 遠

そしてここできわめて重要なことは，やりもらいの動詞が補助動詞として他の一般的な動詞に接続して用いられるという点である。これは名詞項無しでも名詞項の数や，行為および恩恵の及ぶ方向を示唆するものとなる。

(13)　ちょっと教えてやっていただけないでしょうか？

この文は，たとえば「{最終的には私（息子の母親である）の利益のために}（先生，あなたが）（私の息子に）教える」というような意味を実現する。

2.2.3 受身

Shibatani（2003: 278）では，「順行－逆行と能動－受動の基礎的な違いにもかかわらず，この 2 つは日本語において同じ原則によってコントロールされている（他の言語においてもその可能性はある）。すなわち，ある行為が話し手の領域へ向かうときには，ちょうど逆行の形式が義務的であるように，受動が義務的である」としている。

角田（2009: 47–50）では，Silverstein（1976）の名詞句階層において，左から右に動作が及ぶ場合には能動文が自然であり，右から左に動作が及ぶ場合には受動文が自然であるとしている。なお，無生物主語が人間をはじめとする有生物の目的語に働きかける他動詞の表現が日本語では一般的でないことも，角田（2009）は名詞句階層によって説明している。

1 人称＞ 2 人称 [13] ＞ 3 人称＞親族名詞・固有名詞＞人間名詞＞動物名詞＞無生物名詞

図 3　シルバースティーンの名詞句階層（角田（2009: 41）より一部改変）

野田（1997）は日本語とスペイン語のボイスに関する対照研究であるが，そこには次のような記述がある。

日本語の交替型のボイスの機能は，スペイン語と比べると，次のような機能を持っている。
ノ）話し手に近いものを主格にしようとする傾向が強い　（野田 1997: 104）

[13] 角田(2009)では 1 人称＞ 2 人称となっているが，シルバースティーン自身の提案では 2 人称＞ 1 人称であったという（角田 2009: 41）。このことは沖縄や九州で 1 人称から 2 人称に行為が及ばんとする場合に，受身の形式が用いられることとも関連していて興味深い。

野田（1997: 105）は，「複文の場合，日本語では，従属節の主格と主文の主格を一致させようとする傾向が強い。」とし，ボイスがその一致のために機能していることも指摘している。

受身に関して我々はあまり人称というものを意識しないが，次のような現象に相対した時，人称が関連していることを意識するのではないだろうか。

沖縄や九州では，1 人称から 2 人称に行為が及ばんとする場合に，受身の形式が用いられる[14]。内間（1994）は沖縄方言，瀬戸口（1987）は鹿児島県指宿郡山川町徳光方言の例である。

(14) タックルサリーンロー （なぐられるぞ。なぐるぞの意）
(15) ミジ ハキラリーミ （水をかけられるか。水をぶっかけようかの意）
（以上，内間 1994: 393）

(16) ワイガ ウダユッ ドネー。
おまえが打たれるぞ（おまえをたたくぞ）。
(17) アユマンナ テノッヂガエン ドー。
歩かなければ，連れていかれない（連れて行かない）ぞ。（外出時，親が子どもに）
（以上，瀬戸口 1987: 103–104）

このような受身は一般に他の地域では用いられない（このような地理的分布の理由は不明である）。したがって，1 人称から 2 人称に行為が行われる時には能動態が普通であるということになる。つまり上記の方言以外の日本語では，1 ＞ 2 ＞ 3 の人称の階層があるものと考える。このように方言によってゆれのあることは，アルゴンキン諸語をはじめとする反転を持つ言語で，1 人称と 2 人称の順序が一定でないことを想起させる。

2.2.4 働きかけのモダリティによる人称の指定

ロシア語などでは，英語の Let's ~ のような勧誘に特化した形式は無く，1 人称複数形が勧誘に用いられる。逆からみれば，日本語の勧誘形 -(y)oo は 1 人称複数の機能を果たしていることになる。下記（18a）の「行く」の主語は 3 人称と解釈され，主語を 1 人称にするには ik-oo の形にする必要がある。

(18) a. 行くと思います。
b. 行こうと思います。

[14] 瀬戸口（1987）は鹿児島県指宿の方言に関する報告であるが，九州北部の柳川等の地域の話者からもこのような表現を使うとの情報を得た。このような受身は，もっぱらある種の脅しであって，聞き手に対してある種の行為を要求する状況で用いられるようだ（「歩かなければ連れて行かないぞ（歩け）」のような）。したがって，前後の文や節の主語は 2 人称となる。筆者はここで受身が用いられる理由は節間で主語を一致させることにあると考えている。他方，福岡（博多）方言では，威嚇の意図で「きさーん，くらさるーけんね（おまえは［そんなことをしたら］なぐられるからな」というが，能動文「きさーん，くらーす！（おまえは［おれが］なぐる）」もよく使うという（査読者の指摘による）。こうした能動文の前後の文において 2 人称を主語とした文がどの程度現れるかは不明だが，少なくとも福岡方言では，受身文の使用がもっぱら節間の主語の統一のためのものであるとはいえないかもしれない。

このこともやはり日本語の意志形 -(y)oo が 1 人称単数主語の機能を果たしていることを意味する。

働きかけのモダリティ[15]では，さらに命令形の主語が基本的に（人間の）2 人称に制限されるということがいわれている（これはおそらく通言語的にいえることであろう）。「雨よ，降れ！」のような非人間・非情物に対する命令形の使用も存在するが，実質的な機能は願望であり，その出現頻度はかなり低いものと思われる。

2.2.5 観察の証拠性（evidential）による人称の指定

仁田（1991: 80–81, 101, 109）には次のような人称制限が指摘されている（アステリスクや下線も同書による）。

(19) a. {* 私／ * 君／子供} が運動場で遊んでいる。
b. {私／ * 君／彼} は学校へ行く（だろう）。

(20) a. 僕は彼に {* 投票するらしい／ ? 投票するにちがいない／ ? 投票するはずだ}。
b. 君は彼に {* 投票するだろう／ * 投票するらしい／ ? 投票するかもしれない}。

定延（2006）は「私は痛みを {感じる／感じている}」に対し，「彼は痛みを {?? 感じる／感じている}」のように非過去形では 3 人称主語が使いづらくなることを指摘し，これは「ている」が「観察」という情報源を述べる証拠性の意味を持っているためであると説明している[16]。

梅野（2011）はテイタ形に証拠性の機能があることについて，人称制限を証拠に論じている。

(21) {?? 私は／妹は} チョコを 5 個食べていた。

他方，観察によらず話者自身に直接知覚される現象，つまり感情形容詞や一部の感情動詞（山岡（2000）参照）の感情主体が 1 人称に制限されることはよく知られている[17]。

以上をまとめると，次のようになろう。すなわち，日本語では，文法カテゴリーとしての証拠性がある程度機能しており，テイル形のように話し手の観察に基づく事実の描写では，その主語は基本的に 3 人称と解釈され，逆に話し手に直接知覚される感情述語では，その主語は 1 人称と解釈されるものと考えられる。

2.2.6 2.2 節のまとめ

以上みてきたように，一見従属部標示型のようにみえる日本語だが，動詞の方にデフォルトの

---

[15] 働きかけのモダリティに関しては，さらにゾ，ワヨ，などの終助詞も主語の人称に関して一定の傾向を示すものと思われるが，これについてはなお先行研究の記述を十分に整理するに至っていない。

[16] ここで興味深いのは，実際に日本語の近畿の方言などでは，進行形などにおいて人称の分化がみられることである。滋賀方言における継続にはテル・トルがあるが，テルは，自称・対称に，トルは他称の生物を主語とする述語につく（杉村 1992: 198）。滋賀方言には，さらに無生物主語を示す特徴的な形式「～タル（eg. 雨フッタル）」が存在する（真田 2002）。大阪方言での「やる」「よる」は第三者の行為・状態に対して使い，話し手の感情を示す（岡本・氏原 2006: 67–68）。

[17] 感情述語と証拠性の関係については，風間（2013）も参照されたい。

人称階層があり，逆行のシステムが十分に用意されている点で，少なくとも話しことばはむしろ主要部標示型の言語の性格を備えているとみることができる。すなわち，

自他動詞：～てくる，受身
複他動詞：やりもらいの動詞（さらに，補助動詞としては大部分の動詞で機能する）

このように，動詞の種類に応じた反転システムが存在する[18]。

欧米の言語は，明示的な人称を表示するので，これはいわば「絶対人称標示システム」と呼ぶことができよう。これに対し，上記日本語のようなシステムは「相対人称標示システム」と呼ぶことができるのではないかと考える。

さらに，働きかけのモダリティの諸形式や，観察に基づく進行形，直接知覚に基づく感情述語などには，人称の指定／制限が存在し，反転形式が使用されない文の一部にも間接的に主語の人称を示すものがあることをみた。

その他にも，尊敬語をはじめとする待遇表現の諸形式なども主語や目的語の人称を示すのに役立っているものと考えられる。連用的な諸形式の中には，- ナガラのように異主語を許さないものや，- ナラのように 1，2 人称の間での異主語でもっぱら成立するものなどがあり，これらは一種の指示転換（Switch reference）のように機能して，複文での主語の確定に役立っていると考えられる。

3. 映画のシナリオの分析に基づく帰納的検証

以上第 2 節では，日本語（話しことば）はむしろ従属部標示型の言語ではなく，主要部標示型の言語としての性格を持っているのではないか，という仮説を提案した。しかしこれは今のところ先行研究の知見を総合した単なる仮説に過ぎない。そこで実際の日本語（話しことば）がどの程度主要部標示型の言語としての性格を持っているのかについて，検証してみることにした。

3.1 研究方法

話しことばを調べるために，映画のシナリオを用いた[19]。用いたのは『わが母の記』[20] という映

[18] 日本語の反転における逆行構文を詳しく扱った古賀（2014）によれば，逆行構文に現れる動詞はもっぱら次のような「non-agent の状態変化を含意しない意志動詞」に限られているという：使役移動動詞（蹴る，投げる，送る，等）；表面接触動詞（殴る，触る，等）；伝達動詞（言う，話す，書く，電話する，等）；視覚動詞（見る，見せる，等）；言葉を介して行われる行為を表すさまざまな動詞（脅迫する，批判する，非難する，紹介する，等）など。この上記の点を含め，日本語の反転に関して，さらに詳しくは Koga（2010）も参照されたい。

[19] むろん映画のシナリオは人工的なものであって，本来的な話しことばそのものではない。しかし本稿が目指すさまざまな種類の会話文に立脚した定量的結果を得るためには，独話もしくは 2 人の会話の録音による話しことばコーパスなどは適さない。1 文の認定もきわめて難しくなる。したがってあくまでも次善の策として行ったものであることをことわっておく。

[20] 特にこの映画を選んだ理由はなく，最新のシナリオ集の一番先にあったものを調査対象としたものである。調査する中で，映画の舞台の 1 つである静岡の方言特徴のある発話がいくつかあることに気が付いたが，わずかなもので，結果に何らかの影響があるとは思われない。さらにもう 1 つシナリオ作家協会（編）（2013: 43–66）の『くそがきの告白』についても，試しに手作業だがハ・ガ・ヲをカウントしてみたところ，全文

画のシナリオである（シナリオ作家協会（編）2013: 7–41）。セリフを句点を基準に一文と数え，その中から手作業でハとガとヲを拾った。さらに無助詞の主語と目的語を拾い，予想される主語や目的語が現れなかった文（以下では「項無し」と呼ぶ）も別途カウントした。

他方，述語に関しても 2.2 節でとりあげた諸形式，すなわち，テクル・やりもらい・受身，判断のモダリティの諸形式，働きかけのモダリティの諸形式，テイル／テイタ，感情述語，敬語，終助詞などに注目し，無助詞や項無しに対してそれを補ってどのように働いているかをみてゆく。

以下では，まず 3.2 で定量的な結果について検討し，3.3 で従属部標示要素を，3.4 で主要部標示要素を分析する。

3.2 定量的結果

まず分析の手順について述べる。全文例は 1,250 であったが，まず応答などの感嘆詞（「おう」，「ええ」，「え？」，「さあ」），呼びかけ（「あきちゃん！」），あいさつ（「ただいま」）などの文（76 例）を除外した。複文においては，まずは従属節の主語を標示する要素として現れたハやガも拾った。

下記の表 1 のカッコ内の数字がこのようにしてとりだしたハとガの総数である（これは｛連体／連用｝修飾節内のものを全て含む）。次に主節の主語を標示しているハとガを判断した（太字の数値）[21]。パーセンテージは，個々の要素の出現数を合計数 1,174 で割ったものである（小数点第 2 位以下を四捨五入した）。

したがって，この映画シナリオにおける従属部標示要素の現れ方は，以下の表1のようであった。

表 1　従属部標示要素の現れ

	ハ	ガ	モ主語など	無助詞	主語項無し	計	ヲ
『わが母の記』の主語	**160**（253）（13.6%）	**102**（188）（8.7%）	**50**（4.3%）	**118**（10.1%）	**744**（63.4%）	1,174（100%）	111

まず，「主語項無し」が最も多く，2/3 ほどを占める結果となっている。これは，場面の状況

634 に対し，ハ 88，ガ 58，ヲ 23 であった。『くそがきの告白』における助詞の出現比率は『わが母の記』に比べて 2/3 ぐらいであった。これは映画の内容が原因と思われる。『わが母の記』は，むしろ書いた物の引用からなるセリフなどがあって，むしろ書きことばに一歩近づいた内容の映画シナリオといえるかもしれない。

[21] 主語の判断についてはいくつか難しい問題があったため，ここではその判断に用いた基準を箇条書きで示しておく。①連用的な諸形式で文を終えるいわゆるいいさしについては，その連用的な述語形式の主語をその文の主語とみなした。②判断のモダリティ形式が現れている文では，判断の主体（話者）ではなく，それがついている動詞の行為者を主語とみなした。③複文では文末述語の主語のみをその文全体の主語とした。「～と思う」など思考の動詞などで終わっている文では，トオモウを判断のモダリティ形式として扱うことはせず，「思う」の行為者を主語とした。④ハガ構文では次のように判断した。すなわち「あんたは世の中のことが全くわかってない」という文では「あんたはわかってない」といえるので，「あんたは」を主語とし，「日本人の付き合いはすべて貸借関係が基本だからな」では「日本人の付き合いは基本だからな」では意味をなさないので，「貸借関係が」を主語と判断した。⑤ハによって主題を提示したところで文を言いきり，疑問文を形成するケースが多くみられるが，これは基本的には主語と判断した。ただしこの判断はさほど簡単ではなかった。述語を補って考える際に，「旦那様のお食事は（どうなっているのでしょうか）？」のように補えば「お食事」が主語であると考えられるが，「旦那様のお食事は（どうなさいますか）？」のように補えば，2 人称の人物が主語とも考えられる。本稿の調査では，次の文のように動作の主体が文に現れていて，補う述語がより限定されると判断される場合のみ，動作主体の方を主語と判断した（「あなた，ご夕飯は？」）。なお言いかけて中途で発話を止めてしまったものも，言いきりの場合と同様の基準で判断した。

もしくはハによってある主題が導入されると，その主題が文を越えて機能し，その結果として後続の文においては，主語項が無くともそれが了解されるケースが多く存在するためであろう。これとともに，述語の方から主語が理解される場合もあると考えられる。

次いで，ハの出現数が多いが，無助詞もガよりも多い出現数で現れている。モ主語など[22]の要素が主語項を標示しているケースもかなりあることがわかる。話しことばにおけるこれらの要素のさらなる研究は今後の課題であろう。

(22)「わたし<u>も</u>いた？[23]」
(23)「かたつむりの瀬川<u>って</u>なに」

さらに集団等が動作主として機能する場合にデ主語を認める立場があるが，それに当てはまりそうな例も 2 例見出された。

(24)「うち<u>で</u>おばあちゃんを引き取るんですか？」
(25)「姉さん，これ，うち<u>で</u>預かるから」

今回これらについては「(私たちが) うちでおばあちゃんを引き取るんですか？」のように 1 人称複数主語を仮定し，「主語項無し」としてカウントした。ハ・ガ・モなどによる明示的な主語標示は，合計しても 26.6% にとどまる。まず単に定量的な結果だけからみても，日本語（話しことば）は従属部標示型の言語であるというには問題があるといわざるを得ないだろう。

3.3 従属部標示要素の分析

3.3.1 でハを，3.3.2 でガを，3.3.3 でヲを分析する。

3.3.1 ハについての分析

2.1 節で考察したように，無助詞との対立の観点から考えると，単に主題を示すハの比率はさほど高くなく，対比を示すハの比率が高いことが予想される。そこで主語を示すと判断されたハの 160 例を含む 253 例のハ全体について，その用法を検討してみることにした。

恣意的になることを避けるために，対比のハであるかそうでないかについては，次の 4 つの基準から判断することにした。

①前後の文脈に対比の対象（下記の例の下線太字部分）が明示されており，対比であることがはっきり確認できるもの

(26)「**あなた，**だいじょうぶ？」「(まじまじと母を見て) 僕<u>は</u>だいじょうぶだけど」
(27)「洪作<u>は</u>沼津中学に行ったのよ」「そうね，**私たちが**台北へ行ったときね」

[22] モ主語などの具体的な中身は次のようであった。カッコ内の数値は出現数である：モ（28），ッテ（9），ナンカ（3），ダッタラ（2），ッタラ（2），デモ（2），ナンゾ（1），トキタラ（1），ナンテ（1），マデ（1）。
[23] 以下の用例では，出現した従属部標示要素としての助詞などに囲み線を付した。さらに関連する重要な要素には，下線と太字で示したものがある。

②ダケなどの要素（下記の例の下線太字部分）により対比が示されているもの

(28)「負けん気**だけ**は人の百倍も強いら」

③従属節中のハ（従属節には対比のハしか入らないことが指摘されているため）

(29)「愉しかった思い出は消えて，つらかった思い出だけが残ってしまうのよ」

④（時の副詞などを含む）主語以外の要素，つまり斜格項をハがとりたてているもの

(30)「来週**に**は戻ります」
(31)「おかず**に**は本当に困った」

ただし，時の副詞についていても，他に主語が考えにくく，主語と考えざるを得ないものは主語とし，対比ともみなさなかった。

(32)「きょうはこの子のお食い初めのお祝いです」

④の基準から対比のハと判断されたもののホストの内訳を以下の表 2 に示す。

表 2　基準④による対比のハのホスト

（ガ）[24]	（ヲ）	ニ	デ	カラ	ヘ	ト	テ	時	副	計
5	17	17	3	1	1	3	5	25	2	79

ここで, 表 2 に示したホストのうち説明の必要なものについて述べておく。まずガの 5 例とは, 次の例にみるようないわゆる対象語を示すガである。

(33)「そばがきは嫌いだ」

テ形についた例は次のようなものであった。(35) の例は複合格助辞ニトッテについたものと分析することも可能であろう。

(34)「忘れてはいないみたいだけど」
(35)「結局，おとうさんにとっては自分の母親も小説の題材でしかないのよ」

副詞として分類したのは次の 2 例である。

(36)「実際は，びくっと来たから自分で放したんだけど―」
(37)「実はもう買った」

①～③の基準から対比と判断されたものは 53 例であった。したがってこれに④の基準による 79 例を足した対比の全体は 132 例となるが，これは 253 例（うち主語 160 例）のうちの 52.2%

[24] ガとヲは表面上には現れない。

にあたる。したがって，少なく見積もっても今回の調査対象であるシナリオに現れるハの約半数は対比を示しているということになる。

残る約半数の例には，対比と疑わしい例もあるものの，2.1 節で考えた仮説からいえば，無助詞で示されても良いはずのものである。ではなぜハが使われているのか，さらに検討する。調べてみると，これらの例の中にはハを除いて無助詞にすることが難しいものが大部分を占めるが，それには下記の 9 つの類型が見出される。これらを例の多かった順に示す（なお一部の例には下記のうちの 2 つ以上の要因が当てはまるものもあったが，強く働いていると思われた要因 1 つに絞ってどれかに振り分けてある）。

[1]　恒常的な出来事や客観的な事実を説明する文（31 例）

これは先行研究で無助詞にはできないとされていたものである。このうちの大部分は名詞述語文であった。

（38）「紀子はもう 18 才じゃないか！」
（39）「子グマは木から降りる技術を身につけていないから親を追って行くことはできない」

[2]　言いきるもの（20 例）

ハで言いきり，もしくは中途発話になっているものである（註 20 も参照されたい）。

（40）「旦那様のお食事は？」
（41）「でも，それは―」
（42）「じゃあ，ぼくを実家に預けたのは―」

[3]　ハガ構文（14 例）

別項目として分類したが，例をみるとどれも属性叙述文であり，少なくとも話し手は客観的で恒常的な事実と捉えているものと思われる。したがって[1]の下位分類とすることも可能であろう。

（43）「若くなるってことは過去**が**消えていくのね」
（44）「あんたは世の中のこと**が**まったくわかってない」
（45）「紀子は体**が**弱いんだ」
（46）「私はあきらめ**が**いいんだから」

ハモの組み合わせになっているもの，つまりハモ構文とでもいうべき例も 2 例得られたが，同じくここに含めた。

（47）「君は文章**も**ゴルフも力み過ぎだ」
（48）「あの坂は足**も**滑るしね」

[4]　長い連体修飾節を受けた（形式）名詞が主語であるもの（10 例）

このタイプの例もやはりハを無助詞に替えることは難しいと思われる。このタイプにも一部は

（少なくとも話者にとって）恒常的事実であるとみるべき例がある。

（49）「湯ヶ島に預けたのは一生の不覚だったわ」
（50）「この年齢になって子供たちの家で箸の上げ下ろしまで気を使う生活はごめんだよ」

上記 [1] ～ [4] の例からハを除くと極めて不自然な表現になってしまうことがわかる。

[5]　否定文（8 例）

否定文の主語が一般にハをとりやすいことはこれまでも指摘されている。この場合無助詞やガが全く不可能とはいえないが，やはり成立しにくいものと考えられる。

（51）「おとうさんはい**なかった**わよ」
（52）「そういう言い方は**ない**でしょう」

[6]　ノダ文（6 例）および体言締め文／マーメイド構文（2 例，角田（1996）参照）

（53）「だけど，記憶から親父はすっぽり抜け落ちている**んだ**」
（54）「琴子はなにやってる**んだ**？」
（55）「こちらに着いた瞬間からぼくはどうも収容所の看守にされてしまった**ようです**」
（56）「おばあちゃんは実家へ帰る**気**？」

これらの中には無助詞にすることが可能なように感じられるものもあるが，その判断は難しい。

上記の例の他にいわば潜在的なノダ文とも考えられるものがある。これはノダ文のノダの部分が現れていないように感じられる文であるが，今回の調査ではノダ文としてはカウントしなかった。

（57）「おとうさんは玄関から入った？」

[7]　倒置によるもの（6 例）

上記 [2] の言いきりに似るが，倒置により文末に現れるハがある。ただしこの場合は，無助詞で表現しても，言いきりほど不自然にはならないようだ。

（58）「姥捨の説話に似通って来た時代に，一瞬だけ挑戦したんだよ，おふくろは」
（59）「なんだ，これは?!」

[8]　指示詞を主語とする名詞述語文（4 例）

大谷（1995a, b）は，指示詞で示される直示的な要素が無助詞になることを指摘していたが，これはおそらく動詞述語文において当てはまることで，名詞述語文ではそうとはいえないようだ。

（60）「あれは単なる使用人です」
（61）「そりゃ（＝それは）またどうしてですか」

[9]　疑問詞疑問文（4 例）

疑問詞疑問文は下記の例のようにノダ文になりやすいが，このこともハが無助詞に替えられない理由であると考えられる。

（62）「琴子はなんでああいう風に反抗するんだ？」
（63）「おとうさんはどんな子供だったの？」

上記の 9 つの類型のいずれかに属する文は 105 例ある。[7] および [6] や [8]，[9] の一部には無助詞でも可能な例があったが，これらを除くと，ハが現れることの理由の説明が全く難しい文は 16 例しか残らないことになる。この残りの 16 例も，対比，もしくは客観的事実，もしくは潜在的ノダ文として説明できそうにも思えるが，いちおう上記の数からははずすことにした。

（64）「わたしは堪忍してもらいますよ」（対比？）
（65）「敵は日増しに手強くなってるよなあ」（話者にとっての客観的事実？）
（66）「いいえ，確かにわたしは道を訊かれた」（客観的事実？ 潜在的ノダ文？）

以上，この節ではハについて検討を加えた。話しことばでのハの使用は対比もしくは恒常的／客観的事実（話者がそう思っているものを含む）がほとんどであり，他のハも無助詞に替えにくい何らかの理由を持つことがわかった。

3.3.2 ガについての分析

先行研究によればガが無助詞に替えられないのは，連体修飾節の中にある場合，総記を表す場合，「存在を表す平叙文」のガである場合，の 3 つであった。この節では主語を示すと判断されたガの 102 例を含む 188 例のガ全体について，その用法を検討する。

複数の要因が同時に生じている場合もあるので，ここではひとまず次のような 3 つのプロセスによる階層的な選別を行うことにした。すなわち，まず連体修飾節の中にあるかをみる。連体修飾節にない場合には，総記の解釈になっているかをみる。総記ではない，もしくははっきりしない場合には述語を検討し，特に存在動詞でないかを確かめる。

連体修飾節内に現れたものは 23 例あり，これは全体の約 1/9 を占めていた（なお連用修飾節に現れたものは 46 例あった）。

（67）「**海が怖かった**おばあちゃんが海へ行くんだから」

総記であるか否かの解釈を客観的に行うことも簡単ではないが，下記のように何らかの客観的理由付けができるものを総記と判断した。こうして析出された総記の例は全部で 62 であった。

①ダケ，ホウ，（ガ）イイなど，総記を示す明示的要素がある場合（7 例）

（68）「ぼく**だけ**が捨てられたようなもんだ」
（69）「おふくろ**の方**が心配だよ」

(70)「家はにぎやかな**の**が**いい**」

②疑問詞についている場合や，疑問の答えになっている場合（17 例）

(71)「かたつむりと検印と**どっち**が大事だ ?!」

③倒置指定文になっている場合（6 例）

(72)「めげないところが彼の取り柄ね」

④語順の倒置や，ポーズによる強調のある場合（3 例）

(73)「犯されて殺された娘の復讐するのよ，信心深い父親が。」
(74)「じゃなくて，兄さんが，おとうさんに」
(75)「おばあちゃんが！」

⑤すでに導入されている主題があり，それに対して違う主語の行為等を述べている場合（23 例）

(76)「**四十肩か**？」「それもあるけど，脳波が乱れてるの」
(77)「**おとうさんは**いなかったわよ。おかあさんと姉さんと私がしばらくして合流したのよ」
(78)「**高校は金沢。大学は京都。就職は大阪。**作家デビューが東京。」

⑥否定文の主語が強調されている場合（2 例）

(79)「ごめーん！　ごめん！　水着が見つから**なく**って！」

⑦どちらが行為者であるかを明確にする必要がある場合（3 例）

(80)「琴子がダンプで東名高速を突っ走っている」
「（仰天）琴子がダンプ？」
「運転していない運転していない。親切な運転手がいて，別のダンプのおばあちゃんを追いかけている」
「（大混乱）**ダンプがダンプを**？」

⑧2 人称の主体に対して，特別な言い方をしている場合（1 例）

(81)「**若い女**がため息つくな」

全 188 例から，連体修飾節中の例と総記の例を除くと，103 例となる。このうち，存在動詞「ある」「いる」のガの例は，「ある」16 例，「いる」3 例であった。

(82)「そういうのが何人も**いる**んだ」
(83)「コンクールが**ある**んだって」
(84)「洪作さんに話しておくことが**ある**って言い出して」

存現文という観点から，出現・消滅を表す動詞による文に注目すると，これらは 15 例あった。これらの例におけるガの多くも無助詞に替えることは難しいと考えられる。

(85)「先生，来週からの講演旅行の日程に変更が**出ました**」
(86)「ほら，おばあちゃん，トッコが**迎えに来た**でしょう」
(87)「おばあちゃんが**お見え**です」
(88)「俊馬さんが**死ななかったら**おとうさんも生まれていなかったし，」
(89)「若くなるってことは過去が**消えて**いくのね」

感情述語および可能を示す述語には，ハガ構文をとるものがある。ただしハによる名詞項は顕在化していない場合もある。

(90)「あんたは世の中のことがまったく**わかって**ない」
(91)「おとうさんはホントに捨てられるのが**好き**ね」
(92)「おばあちゃん，東京が**嫌い**だから無理でしょう」
(93)「海が**怖い**のかもしれませんね」

さらに身体の部分などがガをとり，文全体の動作主はその持ち主である例も目につく。述語は形容詞述語か名詞述語であることが多い。これらも顕在的／潜在的にハガ構文をとる。

(94)「日本人の付き合いはすべて貸借関係が**基本だ**からな」
(95)「姉妹でもひとりひとり，**性格**が違いますから」
(96)「一人で住むと思えば**気**が楽だ」
(97)「さっき，雨の中で，**心**が一つだったよね」
(98)「おぬいさんも下界での**お役目**が終わってご先祖様のお仲間に入るわけだね」

このようなハガ構文となるもの（感情述語・可能述語・全体部分）においてもガを無助詞に替えることは難しいと考える。こうした例は 26 例あった。

連体修飾節内と総記を引いた残り 103 例から，さらに存在・出現・消滅の動詞の例およびハガ構文の例を引くと，残りは 43 例であり，これは全体の 22.9% である。残りの例をいくつかのタイプに分けて示しておく。

[1]　連用修飾節中にあって，主節とは異なる主語を示しているもの（10 例）

これらは基本的に無助詞でも成立しそうであるが，一部に無助詞が許容しづらいものもある。無助詞にしてしまうとその名詞句が文全体の主題と解釈され，主節の主語が同主語と解釈されるために文意が変わってしまうものもある。

(99)「家族みんなが検印を捺しているのに，おまえはかたつむりと遊んでいるのか！」
(100)「老いってものが消しゴムを持って迫って来ても，消させなかった」

[2]　無生物主語の文（5 例）

このタイプの文の述語は，有対自動詞で非対格動詞であるものが中心を占め，文全体が新情報であることが多いようだ。これらは無助詞でも成立するものと思われる。

(101)「道が凍っててね。」
(102)「雨がやんだ」
(103)「ヒューズが飛んだのかもしれませんね」
(104)「玄関が開いているよ」
(105)「丁度，イモが焼けたぞ！」

残る 28 例については，さらに多様なものが観察される。書いたものからの引用など，口語的でないものの例もある。これらについてはなぜガが出て来るのか，さらに検討していく必要があると考える。しかし，ガについては，連体修飾節内，総記，存現文がその使用の 8 割を占めるという結果が得られた。

3.3.3 ヲについての分析

まず，個々の文脈でヲ格の名詞をとり得ると判断できる述語を全て手作業で拾った結果，333 の述語が得られた。これらの述語は語彙的には当然他動詞ということになりそうだが，必ずしもそうではない。まず他動詞に受身（持ち主の受身を除く）や可能，願望，テアルなどの要素がついたものは，もはやヲ格名詞をとり得なくなるため，これらは除外される。他方，使役のついた自動詞や，経路や出発点のヲ格名詞をとり得る移動動詞（「出る」など），「（文句を）言う」などの動詞はカウントした[25]。

これらの述語について，その対象が①ヲ格名詞として現れているか，②無助詞の名詞として現れているか，③ハやモ，バカリなど，とりたての要素を伴った名詞として現れているか，④名詞項としては現れず，（場面的／言語的）文脈によって判断されているか（つまり「項無し」），⑤移動動詞の場合に，カラなどヲ以外の格助詞を伴って現れているか（実際にはカラのみであった），を判断した。なお 1 つのヲ格名詞の対象を 2 つの述語が共有している場合などには，1 つはヲ格名詞，1 つは文脈による判断としてカウントした。

表 3 「対象」を示す名詞の現れ方

①ヲ格名詞	②無助詞	③とりたて	④出現せず	⑤カラ	計
111	72	39	107	4	333

先行研究（黒崎 2003）では，ヲが省略できない条件について，「I 強調を表すヲは省略できない」としているのみであった。「強調」という説明があまり意味をなさないことはよく指摘されてい

[25] なお 1 例のみだが，形容詞がヲ格名詞をとっている例があった（「おばあちゃんが海を怖いってのは聞いたことがないな」）。

る通りである。以下では，今回のデータにみられた傾向について少し述べる。

無助詞が絶対に不可能とはいえないが，動詞直前の位置を離れた対象で，なおかつ主題になり得ない環境の名詞のヲは無助詞になりにくいと思われる。

(106)「どしゃ降りだったわ。沼津へ行く兄さんを駅まで送った日。」

対比の文脈がはっきりしている場合には，無助詞は成立しにくいようだ。

(107)「簡単に言います。伊上洪作を取るか，私を取るか」

他方，ヲが入らず，無助詞でなければならないと思われる例もわずかに存在する。

(108)「おばあちゃん，何かしたの？」

これを「何かをしたの？」とすると非常におかしい。「何かする」が一体となって 1 つの述語を構成しているためであると説明したいが，ではなぜ一体化しているとヲが入らなくなるのか，本当に一体化しているといえるのか，などの問題があり，その理由についてはさらに考える必要がありそうだ。

今回の調査で得られた数値（ヲ格名詞 66.6%，無助詞 21.6%）をどう判断すべきかは難しく，述語の種類や，文中での位置についての検討も紙幅や時間の都合でできなかった。ヲ格名詞の対象と，無助詞の対象との違いについては，今後さらに研究を進めていく必要がある。

3.4 主要部標示要素の分析

主要部表示要素に関しては，3.4.1 働きかけのモダリティの諸要素，3.4.2 判断のモダリティの諸要素，3.4.3 やりもらいの動詞，3.4.4 受身，3.4.5 観察の証拠性に関連する諸要素（テイル形・テイタ形と感情述語），3.4.6 待遇表現，3.4.7 その他，の順に分析していくことにする。

3.4.1 働きかけのモダリティの諸要素

ここでは広い意味での命令の諸形，勧誘形／意志形，およびその他の働きかけのモダリティを示す諸形式についての調査結果を示す。

まず命令については，狭義の命令形（-e/-ro）の他に，テ（／ナイデ）クダサイ，ナサイ，テ形（／ナイデ形）によるいいさしの依頼の形式，禁止の形式（～ナ）を拾った。広義の命令形は 42 例得られたが，主語は全て 2 人称であった。雨などの非情物に対する命令形の使用はみられなかった。

(109)「わさび，すって，兄さん[26]」

(110)「東京戻ったら，お医者さん行きなさい」

[26] 以下の用例では，主要部において主語の人称の推定を可能にしている要素に囲み線を付した。

(111)「窓に近づくな！」

勧誘形／意志形（-(y)oo）は 12 例得られた。主語は全て 1 人称（単数／複数）であった。(114) の例は厳密には 2 人称が主語であるとも解釈できるものだが，勧誘とも解釈できる。

(112)「三人一緒に行こうよ」
(113)「お茶，いれましょうか？」
(114)「おばあちゃん，寝間着に着替えよう」

従属節中のものとみてカウントには入れていないが，従属節中にありながらやはり文全体の主語の決定に役立っている意志形の例も観察された。

(115)「一度あなたに話しておこうと思っていたんだが」

他には，～テ／～タラ イイ，～バイイ，～チャ／～タラ ダメ，～タホウガ イイヨ，イイ，など許可や禁止の形式を拾った。これは 22 例あり，(120) のような疑問文で 1 人称となる以外，主語は 2 人称と解釈される。

(116)「見送らなくていいよ」
(117)「そんなもの，洪作さんの小説読めばいい」
(118)「甘やかしちゃだめだよ」
(119)「おとうさんは作家の目線でいいのよ」
(120)「座っていい？」

3.4.2 判断のモダリティの諸要素

ダロ（ウ），デショ（ウ），カモ（シレナイ），ジャナイ（カ），ミタイ（ダ），ヨウダ，ラシイ，カシラ，（終止形）ソウダ，ハズダ，の例が 46 例得られた。

(121)「志賀子，それ，親父の貯金通帳だろ？」
(122)「喪服，しばらく必要ないかもね」

基本的に主語は 3 人称と解釈されるが，下記のような例外も 4 例あった。したがって 3 人称として主語の人称が判断されるのは 42 例である。

(123)(=（55）)「こちらに着いた瞬間からぼくはどうも収容所の看守にされてしまったようです」（1 人称単数）
(124)「いいのかしら，こんなに遅くまで騒いでも」（1 人称複数）
(125)「最近は物忘れがひどくて何度も同じことを言うようだが」（1 人称単数）
(126)「だからうちで引き取るって言ってるじゃないか」（1 人称複数）

(124)–(126) は自分自身の行為や状況について客観的に自分で判断を加えている例である。(126) は形式面で該当するとみて拾った例だが，機能的には判断のモダリティというより，働き

かけのモダリティにシフトしているとみられる。

3.4.3 やりもらいの動詞

やりもらいの動詞に関しては，複文の従属節中のものも検討した（ただし従属節中のものは 1 例のみだった）。テ ヤル（1 例），テ アゲル（4 例），テ クレル（12 例），テ モラウ（11 例）の合計 28 例（うち従属節中 1 例）が得られたが，全て 2.2.2 で考察したような人称関係に当てはまるものであった（下記丸カッコ内は **行為者の人称＞受益者の人称**）。ただし，やりもらいの動詞によって両者の人称が完全に確定するわけではない。下記の例では命令文である（127）を除いては，言語形式だけでは決まらない。言語形式だけからでは，《 》内のような人称の階層になることも考えられる。

（127）「瀬川君，言ってやってよ！」（2 ＞ 3）
（128）「随分，いろいろなことをしてあげたものね。」（1 ＞ 3）《1 ＞ 2》
（129）「応援寄越してくれないの，珠代さん？」（3 ＞ 2）《3 ＞ 1, 2 ＞ 1》
（130）「香奠帳は返してもらいますよ」（2 ＞ 1）《3 ＞ 1》

3.4.4 受身

受身についても，従属節中のものを含めて検討した。全部で 27 例あり，うち従属節中のものは 7 例であった（なお，いいさしは主節扱いである）。その主語は 3 例を除いて全て 1 人称であった。

（131）「わたし，映画館から呼び戻されました」
（132）「湯ヶ島に捨てられたんだ」

終助詞ヨのついた述語では，主語は 2 人称と解釈されるようだ。このような例は 2 例みられた。

（133）「ひとりで行ったらそれこそ雷落とされるよ」

3 人称の人物でも，話し手の親族である場合に主語となっている例が 1 例のみみられた。

（134）「明夫さん，先月車にはねられたんだよ」

いいさしを含め，連用修飾節内に受身がある場合にも，1 人称が主語と解釈される例が多くみられた。

（135）「そんな急に言われても」
（136）「警察の人に電話しろと言われたので」
（137）「あの世で香奠返さなかったと言われたらどうするの」

連体修飾節や名詞化の中にある受身は 1 人称主語を指定するものとしては機能していなかった。

（138）「瀬川君，怒鳴られまくり」（3 人称主語）
（139）「小説に書かれたせいか？」（3 人称主語）

3.4.5 観察の証拠性に関連する諸要素（テイル形・テイタ形と感情述語）

テイル形・テイタ形については，主節のもののみを考察したが，予想通りある程度多くの例が存在した（51 例）。先行研究の知見からは，主語は基本的に 3 人称になると予測される。しかし，51 例のうち 3 人称主語のものは 30 例で，2 人称主語のものも 13 例，1 人称主語のものも 8 例あった。

そこでまず 2 人称主語のものの内容を詳しく検討してみると，質問でありなおかつ結果継続（もしくは恒常／習慣）のテイル形・テイタ形であるものが多いことがわかる。

（140）「留学考えているの？」
（141）「なに，来てた（＝来ていた）の？」「うん，来てた（＝来ていた）」

他方，疑問や発見，反語などではあるものの，いずれにせよ進行を示すテイル形・テイタ形で 2 人称主語のものも 4 例あった。

（142）「あんたたち今，俊馬さんの話をしていたね」
（143）（=（99））「家族みんなが検印を捺しているのに，おまえはかたつむりと遊んでいるのか！」
（144）「だれのおかげでこの家に住んでいるんだ！」

次に 1 人称主語のものをみると，1 例を除き，全て質問に対する答えであった。また 8 例中 6 例は結果継続のテイル・テイタであった。

（145）「文句があるなら出てけ！」「それができればとっくに出てます（＝出ています）！」
（146）「アメリカさん，聞こえているのかい？」「はい，聞こえてます（＝聞こえています）！」
（147）「わかってるよ（＝わかっているよ）」

答えではない唯一の例外は次のような遂行文のものである。これはアスペクト的には現在進行と考えられるが，たとえ現在進行でも遂行文であるため，かなり特殊なものということになる。

（148）「心から感謝している」

現在進行と考えられるもう 1 つの例は否定文なので，現在進行そのものとみるには少し問題がある。

（149）「押し付けるなよ」「押し付けてないよ（押し付けていないよ）」

結局，現在進行のみに限った場合，80% 以上は 3 人称主語になっていることがわかる。

感情述語としては，願望のタイや好悪などの語彙的な感情述語の例が 22 例得られた。その感情主体は，疑問であれば全て 2 人称，疑問でなければ全て 1 人称であった。

（150）「大学院を終えたらそうしたいわ」
（151）「会いたいんだ？」「会いたい」
（152）（=（33））「そばがきは嫌いだ」

(153)「おじいちゃんよりも好きだったんですか？」

3.4.6 待遇表現

現代語の敬語は，素材敬語から対者敬語の性格を強めているといわれている。したがって尊敬語の用いられた文の主語は 2 人称になることが多いと考えられる。他方，謙譲語の主語は（身内の者以外は）1 人称が主となるだろう。さらにマイナスの待遇表現，すなわち軽卑語も 2 人称に対してその効果を発するものと考えることができる。主節（いいさしを含む）で待遇表現の観察された例は 8 例あった。本調査では次のような例が得られた。

(154)「兄さんは昨夜遅くこちらに入られたんですか？」
(155)「じゃあ失敬するよ」
(156)「あんた，毎日家でごろごろしていいご身分ですね」
(157)「ブーブー兄ちゃんをかっさらいやがって」

しかし疑問文でなければ，3 人称主語に解釈される例もやはり見出される。このような例は 8 例中 2 例であった。

(158)「おばあちゃんがお見えです」
(159)「台湾へ渡るのは死ぬ思いだったとおっしゃってました」

疑問文でも 3 人称主語の例が 1 つあった。このような例では，前の文脈がない限り言語形式だけからでは主語の人称を判断することはできないことがわかる。

(160)「元気元気。おふくろの方が心配だよ」「どうかなさったの？」

3.4.7 その他

この節では，先行研究には記述がなかったが今回の調査を行う中で，主語の人称に明らかな偏りがあると感じられた要素をとりあげることにする。とりあげる要素は，遂行文，思考や知識に関する動詞，テオク・テミル，テクル（移動），およびル形である。

下記のような例はいわゆる発話行為論でいう遂行文（発話内行為）である。このような例は 17 例あった。

(161)「頼む」
(162)「よろしくお願いします」
(163)「ちょっとお邪魔しますよ」
(164)「大きな声出してすまなかった」

形式としてはル形（マス形），否定過去形などであり，その発話内行為も謝罪，依頼，宣言などさまざまであるが，このような遂行文の主語は 1 人称に限られると考えられる。上述したように，「ただいま」などのあいさつはまず考察の対象から外したのだが，発話内行為の一部はあい

さつと連続していることがわかる。先行研究の存在を確認する時間がなかったが，遂行文の性格から考えてその主語が1人称に限られるのは通言語的に当たり前のこととも考えられる。

一方，次のような文も遂行文に近く，この例では1人称に解釈されるが，「あの人が私に頼んだのよ」といえることから，その発話そのものがアクチュアルにその場所その時点で発話内行為となっていなければ，1人称に限定されることはないようだ。

(165)「あんたの七十のお祝いにね，洪作さんに頼んだのよ」

思考や知識に関する動詞は，上記の遂行文に近い性格を持っており，他方「思う」などの動詞はモダリティを示す形式として文法化していることが指摘されている。このような動詞の主語は疑問文では2人称，疑問でなければ1人称に限定されるものと思われる。このような例は32例あった。

(166)「でも，よく今日まで続いて来たと思うわ」
(167)「お祝いの品を送ってやろうと思ってね」
(168)「香奠帳が何かくらい知ってますよ」
(169)「わかりました」
(170)「う～ん，よくわかんない」
(171)「ブーブだよ，ブーブ。知らない？」
(172)「あのころ書いたものは全部忘れた」

テクル（「行って帰ってくる」の意のもの），テミル，テオクのような意図的な補助動詞のついた述語のル形も，1人称主語に限定されるようだ。このことは「? あの人が注文してきます」，「?? あの人が探してみます」，「?? あの人が布団を敷いておきます」などの文を内省してみても納得できる（なお終助詞ヨをつければ問題はなくなるが，主語が話し手のコントロール下にあることが必要であるように思われる）。特に，テオクについては下記のような1人称主語の例が5例見出され，中にはタ形のものもあった。

(173)「追加注文して来ます」
(174)「私，向こう探してみる」
(175)「お気の済むように探しておきます」
(176)「遅くなると思ったのでお布団，書斎に敷いておきまし**た**」

テミル，テオクに関しては，人間が動作主でなければ使えないことが指摘されている（森山 1988: 255）が，人称について記述しているものは管見の限り見当たらない。

ル形（マス形），特にゾや（ワ）ヨ，ワのような終助詞を伴った場合には，前後の文脈がなくとも1人称主語として解釈されるのが自然なものが多い。受身等が逆行の機能を持ち，1 ＞ 2 ＞ 3の人称の階層が前提として決まっているとすれば，それも納得できる。

(177)「帰るぞ」（ただしこれは 1 人称複数）
(178)「もう一晩泊まっていくわ」
(179)「これから東京へ帰るけど，来週には戻ります」

単なるタ形でも 1 人称主語として自然に解釈される場合がある。

(180)「出版社クビになって行くとこないって言うからさ雇った」

しかし他方で 3 人称で解釈される例が多数あるのも事実である。ル形やタ形は出現頻度も高く，終助詞等との組み合わせも多様である。個々の動詞の語彙的意味との関連も考える必要があると考えられる。ゆえに今回の調査ではル形・タ形に関してこれ以上分析することはできなかった。

3.4.8 3.4 のまとめ

働きかけのモダリティの諸要素 76 例，判断のモダリティの諸要素 42 例，やりもらいの動詞 28 例，受身 17 例，現在進行のテイル・テイタ形 30 例，感情述語 22 例，待遇表現 6 例，遂行文 17 例, テオク 5 例を合計すると, 243 となる（ここでは例外的な人称の主語を示した例は除いた）。これは感嘆詞やあいさつを除いた全文 1,174 のうちの 20.7% にあたる。

4. 結論と本研究の意義，および今後の課題

ハ･ガ･モ（およびその他）のような明示的な形を持った主語は合計 312 例で, これは全文 1,174 のうちの 26.6% にあたるが，ハの使用は対比もしくは恒常的／客観的事実がほとんどであり，ガの使用は総記か，連体修飾節もしくは存現文におけるものがほとんどであることをみた。

対比，総記，存現文は情報構造の観点からみて，有標な要素であり，類型論的にみてこれらの環境に現れる格は, その言語におけるデフォルトの格とはいえないだろう。日本語（話しことば）においては，その他の環境に現れる無助詞形こそがデフォルトの格であるとみることができる。連体修飾節内の主語も，多くの言語で属格が現れることが知られている（日本語にもガノ交代がある）。したがって連体修飾節内のガ主語も，歴史的にガが主格／属格であったことに由来するものとみることができる。

他方，3.4.8 でみたように，（主語の人称が確定的であるようなル形・タ形等を考慮に入れなくとも）20.7% の述語に主語の予測を可能にするような要素が現れていることがわかった。

以上，映画シナリオの分析の結果から，①**日本語（話しことば）は従属部標示型の言語とするには大きな問題があり**，②**他方，文字通りの主要部標示型の言語とみることはできないものの，相対的な主要部標示要素を多数備え，主要部，すなわち述語の方で主語が判断できるシステムをある程度実際に使用している**ことを明らかにすることができた。さらに約半数の文には主語や目的語が現れないが，これは一度設定した主題は文の境界を越えて係っていくためであると考えられる。その意味では③**日本語はやはり主題卓立型の言語**であることが確認できる。

Nichols（1986）が提案した主要部／従属部標示型の類型論はきわめて有効で，射程の広い理

論である。この類型論においてどのタイプに属すかということは，その言語の他の特徴と密接に関連しており，その言語全体の性格を明確に描き出すものとなる。それゆえに日本語がどちらのタイプに属す言語であるのかを（表面的にばかりではなく，さらに実質的にどのようであるのかを）見定めることはきわめて重要であると考えられる。

日本に近い北東アジアには朝鮮語やアルタイ諸言語など，類型的にみて日本語とよく似たタイプの言語が多く分布している。日本語（話しことば）の類型的タイプの再分析とその結果は，これらの言語の分析においてもきわめて重要である。さらに，日本語諸方言では，標準語より無助詞の頻度が高いことが指摘されている。琉球諸言語では無助詞をデフォルトの格と考える記述研究もいくつか現れている（たとえば Shimoji（2014））。諸方言を視野に入れた日本語の歴史研究においても，日本語（話しことば）の類型的タイプの再分析および解明はきわめて重要である。

これまでの日本語研究は書きことばに偏っており，話しことばの研究は遅れているきらいがある。しかし話しことばこそその言語の日常の姿であり，その研究が重視されなければならないだろう。

もちろん純粋な話しことばの研究はさまざまな困難を伴う。複数の話者の談話を録音から書き起こした自然な会話コーパスはまだ少ないし，声の重複やフィラーも多く，文の認定も難しい。ハやガのような要素は検索がきかない上，無助詞や項無しの分析，主語の認定などはもっぱら手作業によらざるを得ない。この研究が１つのきっかけとなって，類型論的な視野のもとで話しことばの文法の研究がさらに進展することを期待したい。

3.4.7 に記したように，ル形・タ形と主語の関係は今後の大きな課題である。大谷（1995a, b）が指摘しているような，各文におけるていねいな情報構造の分析もできなかった。ハ・ガ主語の文と無助詞・項無しの文の間における，主要部標示要素の分布も明示するに至らなかった。主題の提示位置や，それがどのようにどこまで後の文に引き継がれていくのか，といった主題卓立型言語としての性格の分析もほとんどできなかった。今後はさらにこのような課題についての解明を行っていく必要があると考えている。

参照文献

Bloomfield, Leonard (1946) Algonquian. In: Harry Hoijer et al. (eds.) *Linguistic structures of Native America*. Viking Fund Publications in Anthropology 6, 85–129. New York: The Viking Fund.

Dayley, Jon P. (1985) *Tzutujil grammar*. University of California Publications in Linguistics 107. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

遠藤史（1996）「北方諸言語における人称の反転」『日本言語学会 第 113 回大会予稿集』14–16.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251–299.

風間伸次郎（2013）「アルタイ型言語における感情述語」『北方人文研究』6: 83–102.

Koga, Hiroaki (2010) *The inverse and related voice constructions in Japanese: From a functional-tyological perspective*. Unpublished Ph. D. dissertation, Tokyo University.

古賀裕章（2014）「日本語の逆行構文」研究会発表レジュメ（2014/12/12 於東京外国語大学）.

久野暲（1978）『談話の文法』東京：大修館書店.

黒崎佐仁子（2003）「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2: 77–93.

宮島達夫・仁田義雄（編）（1995）『日本語類義表現の文法（上）単文編』東京：くろしお出版.

水谷信子（1985）『日英比較 話しことばの文法』東京：くろしお出版.

森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』東京：明治書院.
Nichols, Johanna (1986) Head-marking and dependent-marking grammar. *Language* 62: 56–119.
Nichols, Johanna and Balthasar Bickel (2005) Locus of marking in the clause. In: Martin Haspelmath, Matthew S. Dryer, David Gil, and Bernard Comrie (eds.) *The world atlas of language structures*, 98–101. New York: Oxford University Press.
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房.
野田尚史（1996）『新日本語文法選書「は」と「が」』東京：くろしお出版.
野田尚史（1997）「日本語とスペイン語のボイス」国立国語研究所『日本語と外国語との対照研究 V 日本語とスペイン語（2）』83–113. 東京：くろしお出版.
大江三郎（1975）『日英語の比較研究―主観性をめぐって』東京：南雲堂.
岡本牧子・氏原庸子（2006）『聞いておぼえる関西（大阪）弁入門』真田信治（監修）東京：ひつじ書房.
尾上圭介（1987）「主語に「は」も「が」も使えない文について」国語学会発表要旨『国語学』150: 48.
大谷博美（1995a）「ハとヲと ø―ヲ格助詞の省略―」宮島達夫・仁田義雄（編）62-66.
大谷博美（1995b）「ハとガと ø―ハもガも使えない文」宮島達夫・仁田義雄（編）287-295.
定延利之（2006）「心内情報の帰属と管理―現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について―」中川正之・定延利之（編）『言語に現れる「世間」と「世界」』167–192. 東京：くろしお出版.
真田信治（2002）『方言の日本地図 ことばの旅』東京：講談社.
瀬戸口俊治（1987）「鹿児島指宿郡山川町徳光方言の方言表現法」『南九州方言の研究』46–158. 大阪：和泉書院.
Shibatani, Masayoshi (2003) Directional verbs in Japanese. In: Erin Shay and Uwe Seibert (eds.) *Motion, direction, and location in language: In honor of Zygmunt Frayzyngier*, 259–285. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
Shimoji, Michinori (2014) A syntactic description of Yonaguni Ryukyuan: With a special focus on alignment and case-marking. *Shigen* 10: 81–106.
Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In: R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112–171. Canberra: Australian National University.
杉村孝夫（1992）「滋賀県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）『現代日本語方言大辞典 1』195–200. 東京：明治書院.
巽智子（2012）「サユラ・ポポルカ語の反転」東京外国語大学語学研究所 Lunchon Linguistics（2012/10/31）配布レジュメ.
角田太作（1996）「体言締め文」鈴木泰・角田太作（編）『日本語文法の諸問題』139–162. 東京：ひつじ書房.
角田太作（2009）［初版 1991］『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版.
内間直仁（1994）『琉球方言助詞と表現の研究』東京：武蔵野書院.
梅野由香里（2011）「完了相を標示するテイタと証拠性表現との関連性」『日本言語学会 第 143 回大会予稿集』202–207.
Whistler, Kenneth W. (1985) Focus, perspective, and inverse person marking in Nootkan. In: Johanna Nichols and Anthony C. Woodbury (eds.) *Grammar inside and outside the clause,* 227–265. New York: Cambridge University Press.
山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』東京：くろしお出版.

例文出典

シナリオ作家協会（編）（2013）『'12 年鑑代表シナリオ集』東京：シナリオ作家協会.

Is Japanese a Dependent-marking Language? —Analysis of a Film Script—

KAZAMA Shinjiro

Tokyo University of Foreign Studies / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

Literary Japanese seems to be a typical dependent-marking language because it does not have personal verb endings, and the grammatical relation between the verb and the core arguments is expressed by case particles. However, when we observe colloquial Japanese, we notice that most sentences have no core arguments, and arguments that do appear have no overt marking to indicate their subject and object functions. On the other hand, some inverse markers such as the *yari-morai* verbs (the grammaticalized auxiliary verbs 'give' and 'receive') and the passive and some modal forms of the verbs and emotional verbs have person restrictions. Therefore, it can be said that colloquial Japanese has the characteristics of a head-marking language.

In this paper, I first examine previous research concerning the hypothesis above and discuss the following topics: (1) the opposition between the arguments with *wa / ga / o* and the arguments with no overt marking and selection condition, (2) how many and what kind of head-marking elements exist in colloquial Japanese.

Second, I examine all the utterances in a movie scene by hand to characterize actual usage in colloquial Japanese. As a result, we can observe 312 (27.8% of all the sentences) tokens of arguments with overt subject marking and 118 tokens without marking. Most of the arguments with *wa* have the function of contrast (*Taihi*), while most of the arguments with *ga* have the function of prominence (*Souki*). Therefore, it can be said that no-marking (or absolute case) is the default case marker of colloquial Japanese. On the other hand, there are 243 tokens (21.6% of all the sentences) of predicates that indicate the person of the sentence indirectly.

In conclusion, colloquial Japanese cannot be regarded as a dependent-marking language. Although it is difficult to regard colloquial Japanese as an exact head-marking language, I have shown that it has various indirect head markers, such as inverse markers, and demonstrated their use.

Key words: locus of marking in the clause, dependent marking, head marking, argument without case marker, inverse